

住吉教会 2016 年度テーマ
「いつくしみ深く 御父のように」
—いつくしみの特別聖年—

神を知ること切に求めましょう (その1)

(ホセア書6章3節)

ジャン・ペンケレシ神父

このあいだ昔からの友達に出会いました。50代の男性で、もう教会に行かなくなったと言っていました。この世界が偶然に出来上がるはずがないと思って神の存在を認めていますが、死んでから後の命がないと考えています。カトリックの中学校・高校に通って、信仰のしっかりした両親と共に毎日曜日ミサに参加していました。この人はどうして信じなくなったのでしょうか。そこで、度々読んだことのある神の言葉が浮かんできました。(ホセア4章6節)

「知識がないので私の民は滅びる」(フランシスコ会訳)

「…私の民は知ることを拒んだので沈黙させられる」(共同訳)

友達の親は神を信じてその教えを守っている人でしたが、神の全能の力と支配を確信して、その愛を体験して深く信じていたというよりも、教えを信じて掟を守ることによって天国に行けるという信仰だったのです。

しかし、技術によって生活が裕福になって全てを合理的に考えて、神がなくても生きていけるという現代社会で、伝統的な価値観と信仰は次の時代に伝わらなくなっています。親はその環境の中で子供に生きた信仰を伝える十分な知識と確信はありません。住吉教会では違うのでしょうか。親の信仰は子供に伝わっているのでしょうか。伝わってなければ、それについて責任を痛感しているのでしょうか。あるいは”仕方がない”とあきらめているのでしょうか。

神のもとに呼ばれた日に、預かっていた信仰のタレントでどれほど儲けをしたか、すなわち頂いた信仰を子供に伝えるという儲けについて責任を問われます。皆さんは確かに子供に信仰を伝えたいでしょう。しかし、子供を教会へ連れて行き、教会に行くように勧めるほかに、子供に伝えるものがあるのでしょうか。ないならば、”沈黙して”しまいます。子供は、霊的なことを考えない社会の雰囲気の中で、永遠の命の希望は遠のいてしまい、魂は”滅びて”行きます。それでよろしいのでしょうか。仕方がない、と言って良いのでしょうか。

神に愛されている確信と永遠の命は、過ぎ去っていくこの人生で残る唯一の宝です。親は誰でも、子供に一番良いものを与えたいのです。教育、財産などを与えるために多くの犠牲を払います。同じように、いつまでも残る唯一の財産を子供に与えるために、思い切って犠牲を払う必要があるではありませんか。”沈黙”しないために神を知るように、その愛を体験するように、思い切って努めなければなりません。(10月号に続く)